

令和2年度 第3回 総合教育会議

令和3年1月15日(金)
午後1時から3時まで
県庁西館4階第一会議室A、B

次 第

1 開会

(1) 知事挨拶

(2) 教育長挨拶

2 議事

(1) 才徳兼備の人づくり小委員会中間報告

(2) 未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進

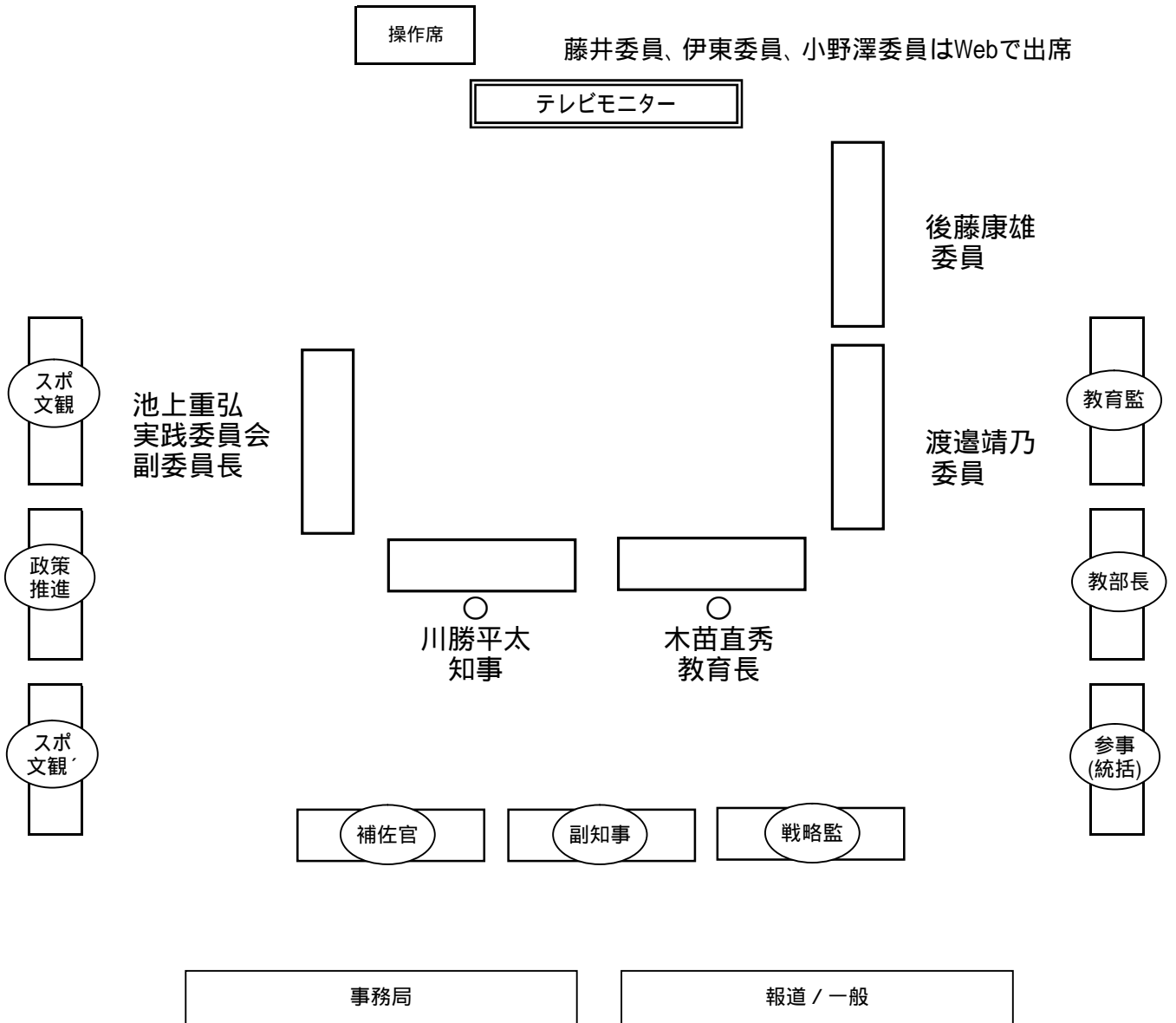
(3) その他

3 閉会

令和2年度 第3回総合教育会議 座席表

日時: 令和3年1月15日(金)13:00 ~ 15:00

場所: 県庁西館4階第1会議室A、B



(入 口)

令和 2 年度才徳兼備の人づくり小委員会の開催実績等

1 令和 2 年度協議事項

新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」

2 開催実績及び今後の予定

区 分	時 期	内 容
第 1 回小委員会 (Web)	5 月 26 日(火)	・現状の把握・課題の整理
第 2 回小委員会	7 月 13 日(月)	・検討の方向性に関する意見交換 ・ニーズ調査の項目検討
ニーズ調査	7 月～ 8 月	・高校生及び事業所に対するアンケート調査
第 3 回小委員会	9 月 28 日(月)	・論点の深掘り
学校視察	10 月 29 日(木)	・浜松湖北高等学校・浜松学芸高等学校視察
第 4 回小委員会	11 月 10 日(火)	・中間報告に関する意見交換
第 5 回小委員会	12 月 24 日(木)	・最終報告に関する意見交換
第 6 回小委員会	1 月 25 日(月)	・最終報告に関する意見交換

3 才徳兼備の人づくり小委員会委員

区分	氏 名	役 職
委員長	池上 重弘	静岡文化芸術大学英語・中国語教育センター長 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会副委員長
委 員	井上 美千子	NPO 法人しずおか共育ネット代表理事
委 員	武井 敦史	静岡大学大学院教育学研究科教授
委 員	寺田 望	株式会社ビズホープ代表取締役
委 員	堀井 啓幸	常葉大学教育学部教授

敬称略・委員は五十音順

新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」(中間報告)

令和 2 年 11 月 25 日

才徳兼備の人づくり小委員会

本県の高等学校教育を取り巻く状況

- 1 急激な社会変化
 - ・ Society5.0 が到来し、雇用形態や労働市場の流動化がより一層進展すると予想
 - ・ 社会の変化を前向きに受け止め、新たな価値に挑んでいく力を育むことが重要
- 2 少子化の進行
 - ・ 県内の中学校卒業生数は、令和 11 年 3 月には 3 万人を下回り、更に減少が続く予想
 - ・ 生徒数の減少を見据え、教育の質の維持・向上を検討していくことが必要
- 3 新型コロナウイルス感染症感染拡大を通じた変化
 - ・ 新型コロナウイルス感染症への対応は、教育の在り方を考え直す契機
 - ・ ICT を活用した学習支援等の効果を検証し教育の質や環境の改善に繋げることが必要
- 4 本県における魅力ある高等学校づくりの推進
 - ・ 県では、地域の実情を踏まえ、新学科設置や新構想高校設置に向けた取組等を推進
- 5 国における教育改革の進展
 - ・ 新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を実施
 - ・ 中央教育審議会が地域社会の課題解決に向けた学び重視の学科等の制度化を検討中
- 6 高等学校に対するニーズの多様化
 - ・ 生徒が高校で身に付けたいことは学力や技術・資格が上位であるのに対し、事業所が高校生に身に付けてほしいことは自ら考え行動できる資質・能力や人間性が上位
 - ・ キャリア教育が必要と考える生徒と事業所は 9 割超だが、学校と地域や企業と関わる機会があるのは、生徒も事業所も半数を下回る状況
 - ・ 地域の人や企業が関わる教育に興味のある生徒は 59.9% だが、高校と地域や企業等が関わる機会が必要だと思っている事業所は 93.0%
 - ・ 将来地域の役に立ちたいと思っている生徒が 82.1% である一方、いずれは静岡県に戻って暮らしたいと思っている生徒は 65.9%

本県の高等学校教育における課題

- 1 高等学校に求められる役割
 - ・ 高校生の社会や自分に対する意識を高め、学びの動機付け等に繋げていくことが必要
 - ・ 「出口」のみを目標とした学習ではなく、様々な課題に挑む力等を育む教育が必要
- 2 地域を見据えた人材育成の必要性
 - ・ 学校内で提供できる学びでは不十分で、学校外の地域資源も最大限活用することが必要
 - ・ 普通科も生徒や地域の実情に応じた特色化、弾力化に取り組むことが必要
- 3 教員を含めた運営体制改善の必要性
 - ・ 教員の業務多忙化が課題であり、子供の学びを学校外から支えていく仕組みも必要
 - ・ 主体的・対話的な学びの実現に組織的・体系的に取り組んでいくことが必要
- 4 地域の実情に応じた魅力ある学校づくり
 - ・ 教育資源や特性、地理的な制約等の地域の実情を踏まえた多角的な検討が必要

本県の高等学校教育に求める姿

< 次代の担い手の育成 >

多様な学びを通じて自ら考え挑戦する力を持ち様々な形で静岡県に貢献する人材の育成

地域社会に開かれた教育

- ・ 自ら学び、考え、課題に立ち向かう力を育む地域社会に開かれた教育

学びのフィールドを生かす教育

- ・ 豊かな自然環境や多様な産業等の地域資源を生かした静岡県ならではの教育

静岡型高等学校教育の実現に向けて取り組むべき施策

1 基本的な施策の方向性と取組

(1) 地域の実情を踏まえた特色ある教育の実施

一人一人の適性や能力に応じ、それらを最大限に伸ばす学びの提供と環境整備
地域の将来像や地域が求める教育等を踏まえた学びを実現

< 具体的取組 >

- ・ 学校外の様々な教育資源を活用した特色ある教育の実現
- ・ 普通科改革、特徴ある学科設置や最先端の実践的な職業教育など先駆的取組の実施

(2) 地域との連携強化に向けた学校の運営体制の改善

教科学習や課外活動だけでなく、授業内で地域と連携した取組を行う体制を構築
外部の多様な主体が高校教育に関わる仕組みを構築し組織的に取り組む体制へ転換

< 具体的取組 >

- ・ コミュニティ・スクールによる学校運営方法や授業づくり等への積極的な関与
- ・ 教員だけでなく地域や企業等の外部の多様な人財を加えたチームの構成
- ・ 地域連携活動を行う生徒が評価される仕組みの導入や成果発表等の機会の創出等

2 基本的な施策を進める上で必要な取組

(1) 地域資源や情報のプラットフォーム構築

地域、企業、大学等の多様な主体が高校教育の現場に関わる仕組みを構築
物的資源や人的資源、地域と連携した実践例等の情報を共有し教育現場で活用

< 具体的取組 >

- ・ 地域の多様な主体の連携組織による高校と地域が一体となった取組の実施
- ・ 教育現場と外部人財が交流し学び合えるプラットフォームの構築
- ・ 高校における先駆的な取組等に関する情報の一元的発信 等

(2) コーディネート専門人材の配置・育成

高校と外部を繋ぐコーディネート機能を確保し、地域と連携した学びを実践
地域連携を中心となって推進する学校と地域を熟知し交渉力のある人材を配置

< 具体的取組 >

- ・ 高校と地域を正しく理解し連携を推進する専門人材が活躍できる仕組みの構築
- ・ 教員が定年後に学校を支援するキャリアモデルの構築
- ・ 地域のコーディネーター間で情報を共有する機会の創出 等

(3) 学校と地域の連携・協働を進める教員の育成

管理職や教員の意識を変え、地域による学びの提供に対する積極的な取組を促進
業務改善による教員の余裕時間の捻出や地域全体で解決する取組を推進

< 具体的取組 >

- ・ 地域連携に関わる教員等の研修会や他校教員等との情報共有を図る勉強会の実施
- ・ 教育現場と外部人財が交流し学び合えるプラットフォームの構築（再掲）
- ・ 教材データベース化やICTによる業務改善の情報共有を行う仕組みの構築 等

3 取組を確実に進めるための方策

短期、中期、長期の課題に分けて段階的に実施

- ・ 短期的課題は、可能なものから速やかに実行し、状況を踏まえて改善
- ・ モデル校による取組を通じて静岡県モデルを構築し、地域の実情に応じて実施
- ・ 中長期的課題は、検討の場を明確にし、バックカスティングの視点で具体的目標を定め検討。モデル的取組での検証も踏まえ可能なところは実施に移行

< 今後の予定 >

12月24日 第5回小委員会

1月25日 第6回小委員会

2月16日 実践委員会へ最終報告

浜松湖北高等学校・浜松学芸高等学校視察（報告）

（才徳兼備の人づくり小委員会）

- 1 日時 令和2年10月29日（木）（浜松湖北高校(午前)、浜松学芸高校(午後)）
- 2 静岡県立浜松湖北高等学校
 - （1）地域や企業と連携した取組の概要等の聴取
 - （2）地元企業、担当教諭との意見交換
 - （3）施設及び授業見学（商業科「電子商取引」授業内で生徒と意見交換）

取組概要

- ・活動を支えるための組織として模擬会社「湖北MAGIC株式会社」を設立して、社長・副社長・取締役には生徒が就任している。月一回の取締役会議では普通科の生徒が活躍し、企画・運営・広報を行う。また、通常の普通科では体験できない販売実習や地域貢献も体験できるのが特徴である。
- ・湖北MAGICは4科連携による地域貢献を柱として年間54回（令和元年度実績）の活動を行っている。活動名の「MAGIC」はMultiplied-education（連携）by Agricultural（農業科）、General（普通科）、Industrial（工業科）and Commercial（商業科）の頭文字である。
- ・商業科が「地元企業応援プロジェクト」として、エネジン株式会社と連携し、地元企業の取材や紹介を生徒が行う。授業では、エネジン社員が教壇に立ち、生徒たちによる取材前の質問等の準備、取材後のブログやニュースの作成を行っている。

企業の声

- ・生徒のやる気が高いので、連携の話は前向きに進んだ。事業2年目は全校生徒が参加し、来場者は1,815名(例年平均3.6倍)となった。今では、地域の人々が参加する一大イベントとなり、地域の発展に貢献している。（はままつフルーツパーク時之栖）
- ・金指駅のクリーン&イルミネーション活動は、当初高校からの提案により駅の清掃から始まった。5年目を迎えた現在は、グッズ販売を行うなど企業としても客を取り込んでいる。（天竜浜名湖鉄道）
- ・高校との連携を通じて地域とのつながりを感じている。高校生による企業取材は、高校生に地元の企業を知ってもらうきっかけとなり、企業にとってもよい面が多い。生徒が作成したブログ等をいろいろな企業に見てもらい、こうした取組を全国へ広げたい。（エネジン）

生徒の声

- ・農・工・商の学科間連携により、いろいろなことに取り組めることが魅力であり、最新の施設設備で学べたことが就職活動にも大いに役立った。
- ・自分のやりたいことが仲間と一緒にできて、先生方も協力してくれる。卒業後も地元に残って地域に貢献したい。

教員の声

- ・湖北MAGICの活動が地域に認知されるようになったことで、連携や協力の依頼が増えており、連携先の精選と理由付け、生徒及び教職員の負担軽減が課題である。

3 学校法人信愛学園浜松学芸高等学校

- (1) 地域や企業と連携した取組の概要等の聴取
- (2) 施設及び授業(探究活動)見学
- (3) 生徒及び担当教諭を交えた意見交換(探究活動の社会科学部地域調査班の生徒、教員)

取組概要

- ・平成29年度からカリキュラムの中に探究活動を取り入れている。探究活動の進展と並行して普通科の特色化にも注力し、令和2年度より、「地域創造コース」を設置した。地域の人とグループ学習を行う「プロジェクト学習」と生徒たちだけで実践していく「クエストエデュケーション」により課題解決学習を行っている。
- ・地域の特色や魅力をブランド化するために、知っている場所から行って見たい場所への変化、「いつか戻ってきたい」と思えるまちの魅力を発信、中高生には共感を、大人には懐かしさを感じる青春を演出、地元の企業や団体と協働する、を活動のポリシーとして掲げている。「はままつ胸キュンプロジェクト」と名付けて活動し、浜松市から「青春はままつ応援隊」に任命され、市の公認活動として実施している。
- ・天竜浜名湖鉄道のオフィシャルポスターの制作や浴衣の卸メーカーのカタログの制作等、地域の企業と連携する取組を展開する。
また、遠州染物によるシャツブランドを立ち上げた活動が、ビジネス手法を取り入れて地域課題を解決する取組を表彰するコンテストで文部科学大臣賞(最優秀賞)を受賞した。その他、「観光甲子園2019」で全国1位を獲得するなど、多くの全国コンテストで賞を獲得している。

生徒の声

- ・当初はメディアに出る部活動とは思っていなくてびっくりしたが、生徒が主体となってアイデアを出し合い、意見をもらいながらやりたいことを追求できているので、現在は楽しさが深まってきている。
- ・森林公園の魅力を発信するプロジェクトでは、活動を通じて地域を元気にする取組だったが、地域の人々から声を掛けてもらい逆に元気をもらった。
- ・訪日外国人に浜松の観光プランを提供するテーマで探究活動を行っているが、英語や地理といった勉強内容が探究活動に活かされているので、教科と探究活動の深い関わりを感じる。

教員の声

- ・生徒たちは、初めは自分たちの知っている狭い地域しか知らないが、探究活動に関わっていく場が多くなるほど、地元への想いが強くなる。生徒たちのアンテナを増やすためにプロジェクトをいくつも同時に行っている。
- ・地域と連携した活動を持続可能なものとするためには、今後も活動を継続していきたいとする生徒本人の気持ちと、現在の活動に対する想いを後輩たちへ受け継ぐことの両輪によって持続可能な活動が実現できることを実感した。

高等学校に関するニーズ調査結果

調査の概要

1 調査目的

令和2年度才徳兼備の人づくり小委員会の協議テーマ「新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」」について、県内の高校生及び事業所のニーズ等を把握し、地域で求められている高等学校教育について、実態を踏まえた議論を行うことを目的に「高等学校に関するアンケート」を実施した。

2 調査概要

【高校生のニーズ】

調査期間	令和2年7月27日～8月11日
調査対象	静岡県内の公立・私立高校に通う高校1年生
サンプル数	調査票配布枚数：136校・8,148枚 調査票回収枚数：126校・6,072枚 回収率：126校/136校（92.6%）
調査方法	各学校にアンケート調査票を配布 各学校で、アンケート調査を実施する1年生のクラスを選定 ・単一学科の学校は1クラスを選定 ・複数学科を設置している学校は、学科ごとに1クラスを選定

【事業所のニーズ】

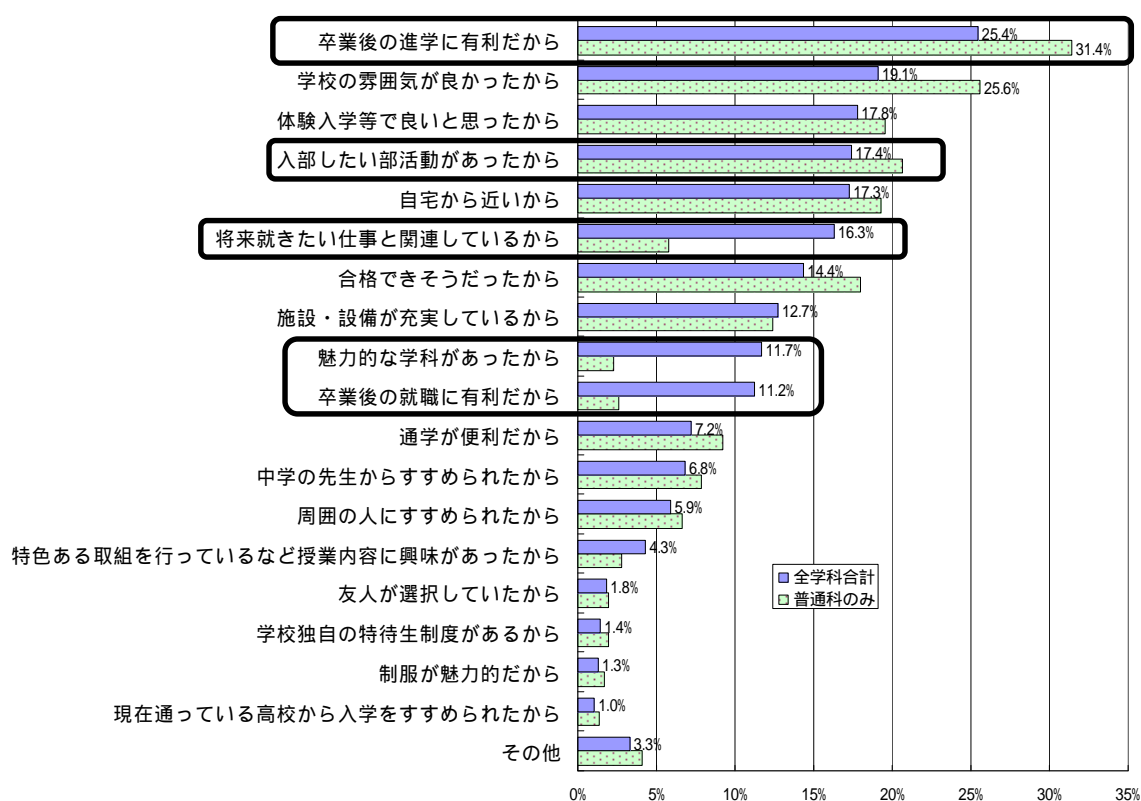
調査期間	令和2年8月3日～8月21日
調査対象	静岡県内の事業所
サンプル数	調査票配布枚数：3,000枚（東部974枚 中部939枚 西部1,087枚） 調査票回収枚数：995枚 回収率：33.2%
調査方法	静岡県内の事業所のうち従業員数50名以上の事業所について、地区（東部・中部・西部）及び業種における事業所数で按分し、地区及び業種ごとの事業所数を決定 地区及び業種ごとに無作為で抽出 各事業所の人事採用担当部署あてにアンケート調査票を配布

調査結果

1 高校選択の理由

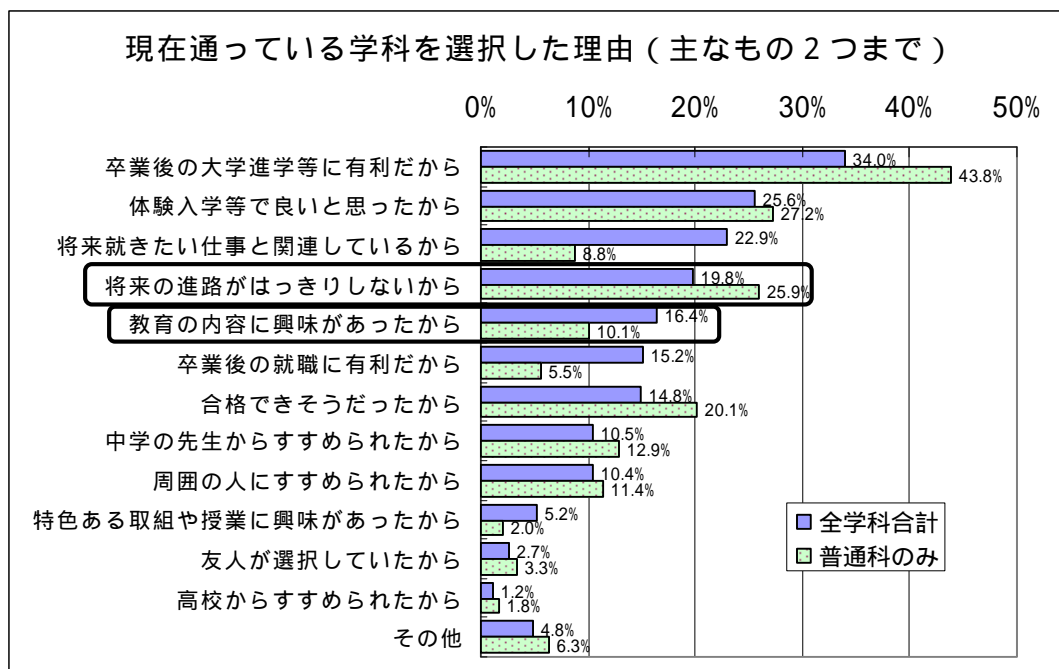
- ・現在通っている学校を選択した理由は、全体では「卒業後の進学に有利だから」が最も多くなっている。
- ・全体の過半数を占める普通科(3,311人)の31.4%が理由に挙げていることが大きい
が、理数系学科で約5割、英数科で約1/3となっているほか、商業科でも約2割弱
が理由に挙げている。
- ・普通科のみでは、「卒業後の進学に有利だから」が31.4%で最も多く、「将来就きたい
仕事と関連しているから」、「卒業後の就職に有利だから」は低くなっている。
- ・工業科、商業科、農業科、水産科等では普通科と比較し、「将来就きたい仕事と関連
しているから」、「卒業後の就職に有利だから」が多くなっているが、「卒業後の就職
に有利だから」が工業科で47.1%、商業科で37.2%、農業科で17.4%、水産科で30.0%、
「将来就きたい仕事と関係しているから」が工業科で38.4%、商業科で13.1%、農
業科で31.5%、水産科で37.5%となっており、半数以上の生徒が必ずしも将来の職
業と結びついていない結果となっている。
- ・福祉科では68.6%、芸術系学科では60.9%が「将来就きたい仕事と関連しているか
ら」としており、こうした分野では、将来の目標を持って高校を選択している生徒が
多いことがうかがえる。
- ・芸術系学科の50.0%、探究系学科の41.0%、国際・英語学科の57.9%が「魅力的
な学科があったから」としており、こうした分野に魅力を感じて高校を選択する生徒
がいることが分かる。
- ・「入部したい部活動があったから」がスポーツ探究科では72.5%と多くなっているが、
普通科や商業科でも2割が理由に挙げている。

現在通っている高校を選択した理由（主なものを2つまで）



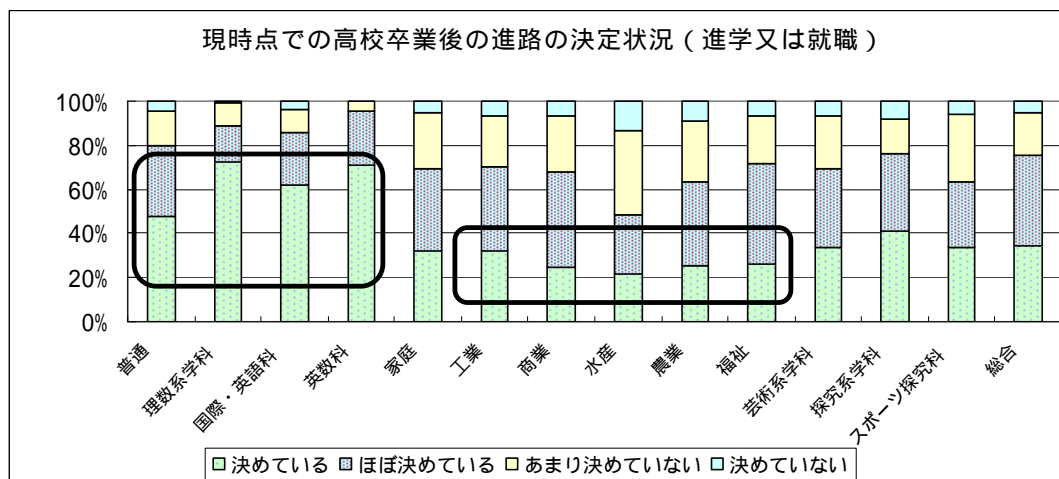
2 学科選択の理由

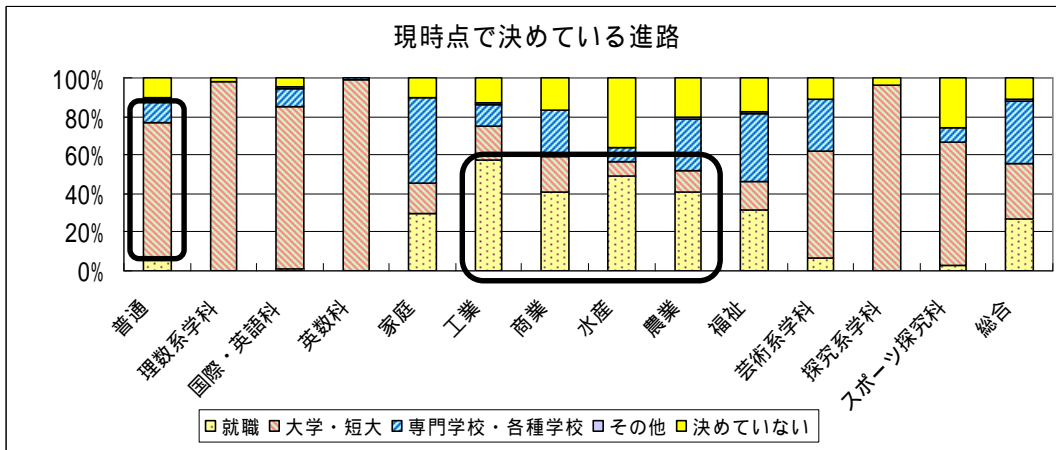
- ・現在通っている高校を選択した理由と同様、普通科や理数系学科では「卒業後の大学進学等に有利だから」、その他の学科では「将来就きたい仕事と関連しているから」、「卒業後の就職に有利だから」が多くなっている。
- ・普通科では「将来の進路がはっきりしないから」を選択した生徒の割合が高く、「教育の内容に興味があったから」を選択した生徒の割合が低くなっており、明確な目標のないまま普通科を選択している生徒も多いことがうかがえる。



3 進路の決定状況

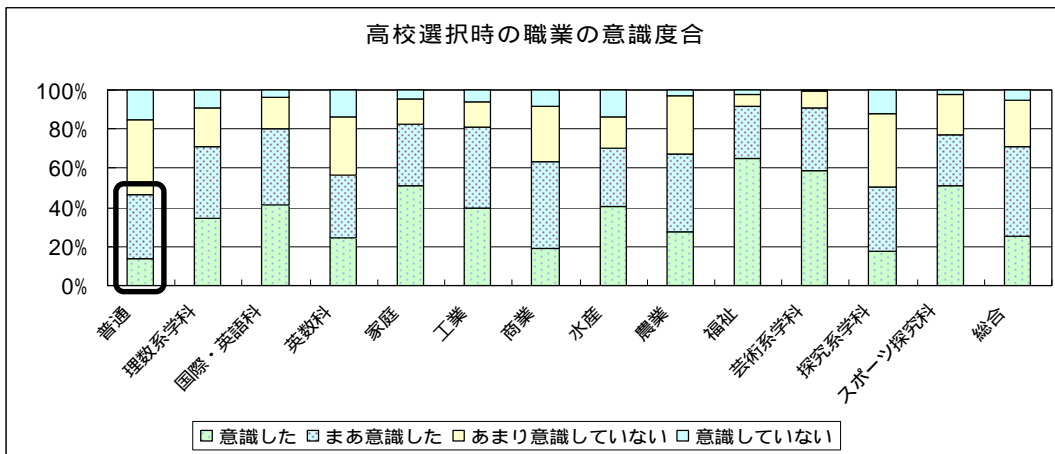
- ・現時点での高校卒業後の進路を決定している割合は、普通科より専門学科の方が低くなっている。
- ・具体的な進路については、普通科では 83.1% が進学、工業科、商業科、農業科、水産科の 46.5%（4 学科平均）が就職となっている。
- ・普通科の多くが大学進学を視野に入れているのに対し、専門高校では就職だけでなく進学も可能であることから、高校入学の段階では決めかねていると推測される。





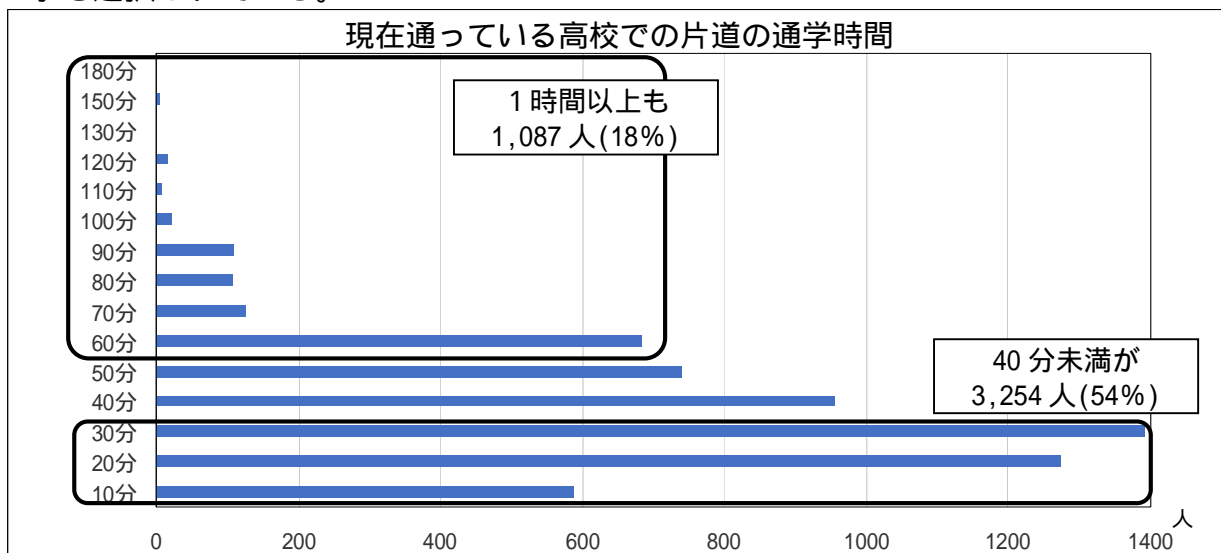
4 高校選択時の職業の意識度合

- ・職業を意識して高校を決めた生徒は、普通科以外では 70.0%であるのに対し、普通科では 46.4%にとどまっており、将来の明確な目標がないまま普通科へ進学している生徒も多いと見込まれる。



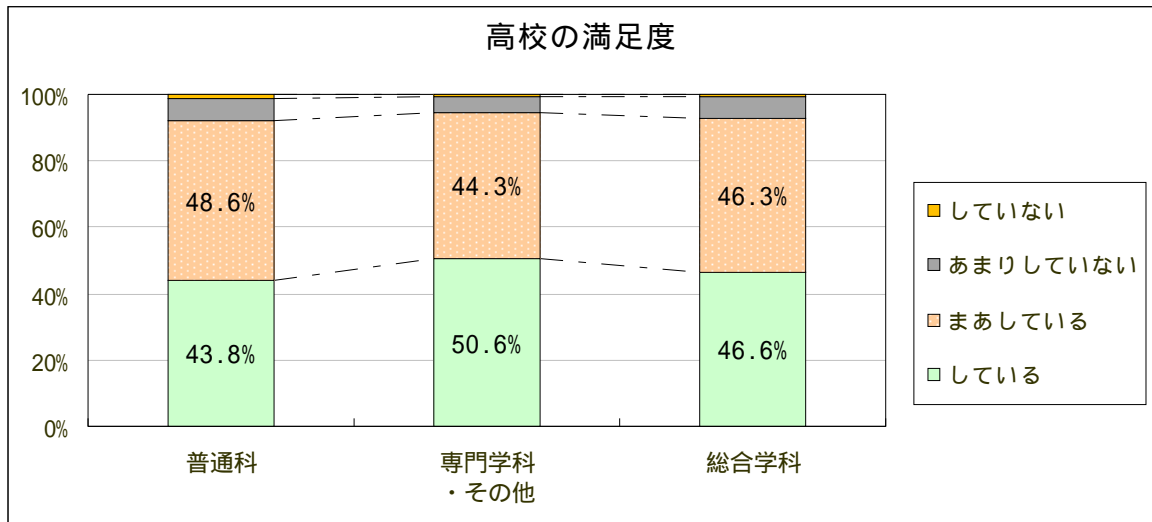
5 通学時間

- ・片道 40 分未満が全体の 54%であるが、1 時間以上も 18%を占めている。
- ・自宅近隣に高校があっても、希望する高校がある場合は、片道 1 時間以上の遠距離通学も選択されている。



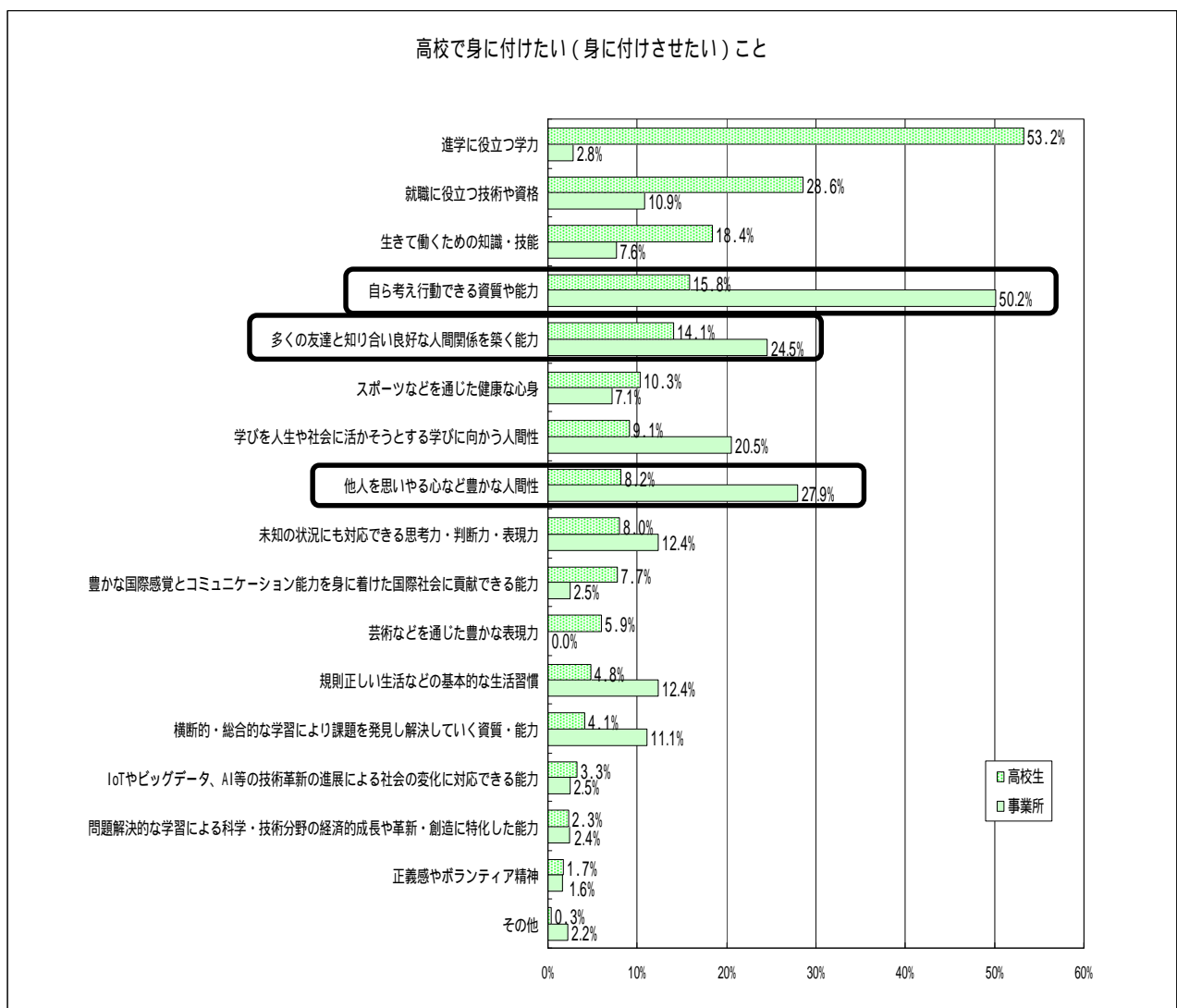
6 高校の満足度

- ・現在通っている高校について、「満足している」、「まあ満足している」を合わせると93.4%となり、満足度は高い。
- ・普通科と比較すると、専門学科の方がやや満足度が高くなっている。



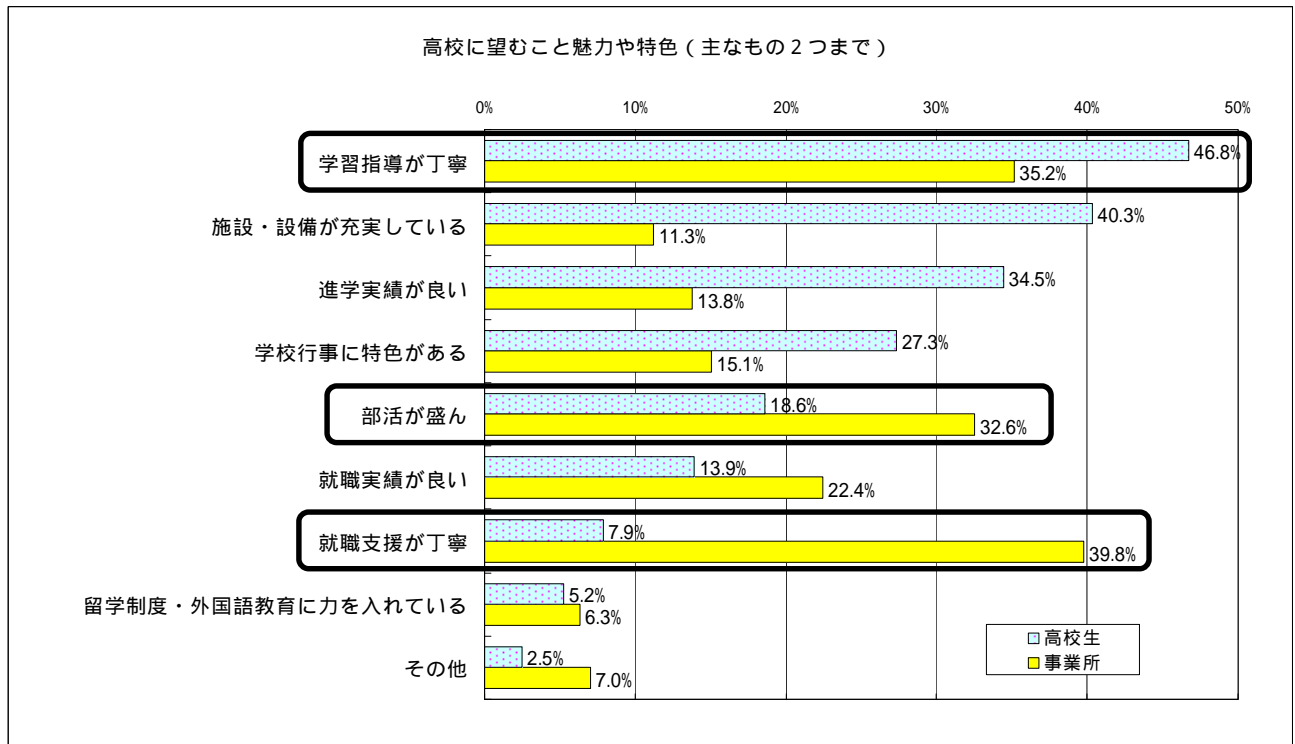
7 高校で身に付けたい(身に付けさせたい)こと

- ・ 高校生が高校で身に付けたいことは、全体では「進学に役立つ学力」が 53.2%で最も多く、次いで「就職に役立つ技術や資格」の 28.6%、「生きて働くための知識・技能」の 18.4%となっているが、普通科では、「進学に役立つ学力」が 66.7%で最も多く、次いで「自ら考え行動できる資質や能力」の 18.2%となっている。
- ・ 事業所が高校生に身に付けてほしいことは、「自ら考え行動できる資質や能力」が 50.2%で最も多く、次いで「他人を思いやる心など豊かな人間性」の 27.9%、「多くの友達と知り合い良好な人間関係を築く能力」の 24.5%となっている。
- ・ 高校生は、進学のための学力や就職のための資格・技術を意識しているが、事業所側は、自ら考えて行動する能力や人間性・社会性を重視しており、高校生と事業所で高等学校に求める教育に相違が見られる。



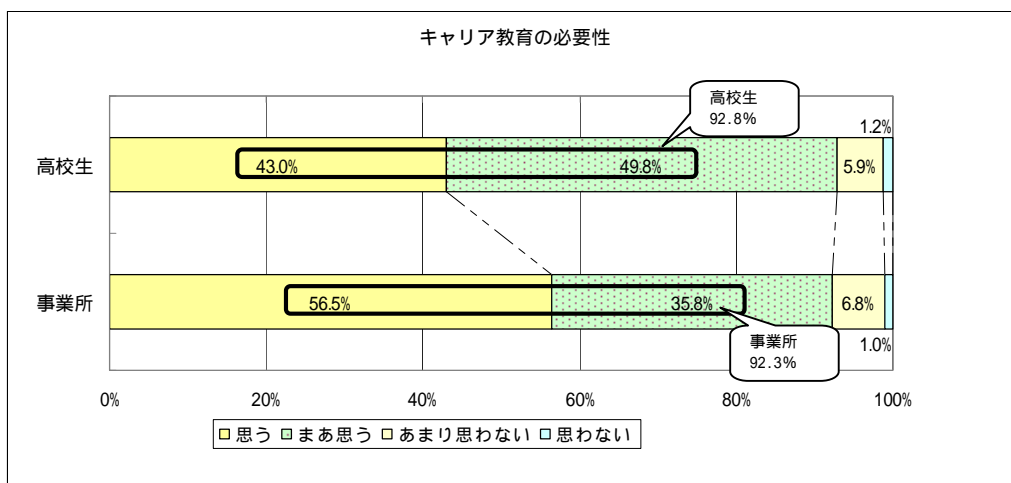
8 高校に望む魅力や特色

- ・ 高校生の半数近くが「学習指導が丁寧」、「施設・設備が充実している」を魅力的な高校としている。
- ・ 事業所が高校に求める魅力や特色は、「就職支援が丁寧」が39.8%で最も多く、次いで「学習支援が丁寧」の35.2%、「部活動が盛ん」の32.6%となっている。



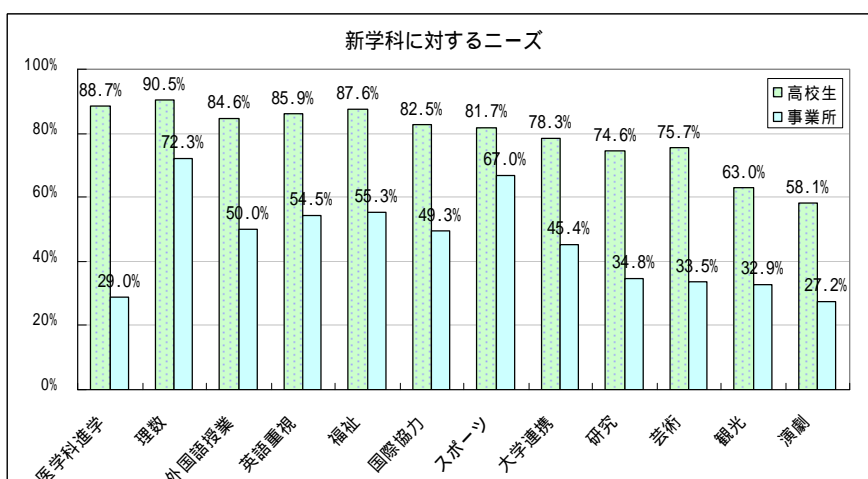
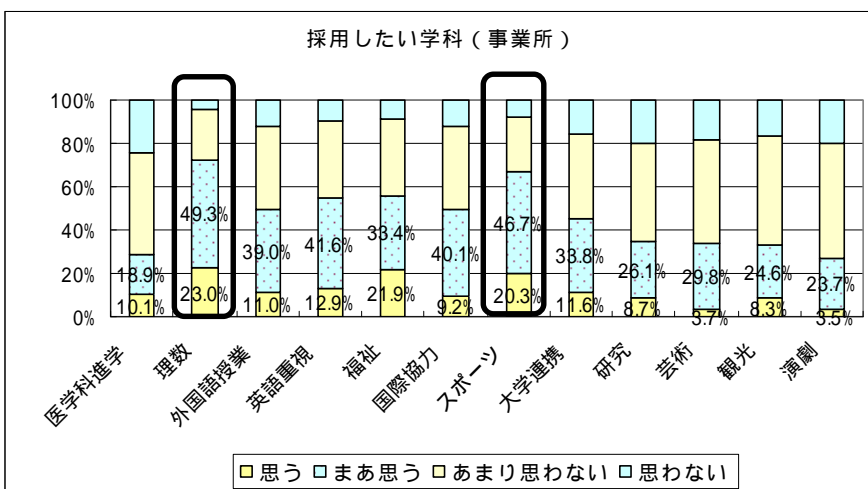
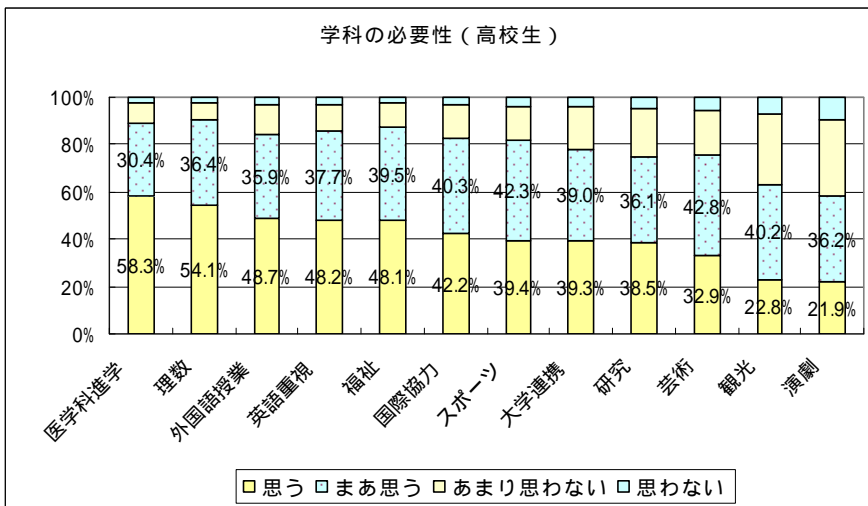
9 キャリア教育の必要性

- ・ キャリア教育については、高校生の92.8%、事業所の92.3%が必要だと回答しており、関心の高さがうかがえるが、事業所より生徒の「まあ思う」の割合が高くなっており、漠然と捉えている高校生も多いと思われる。



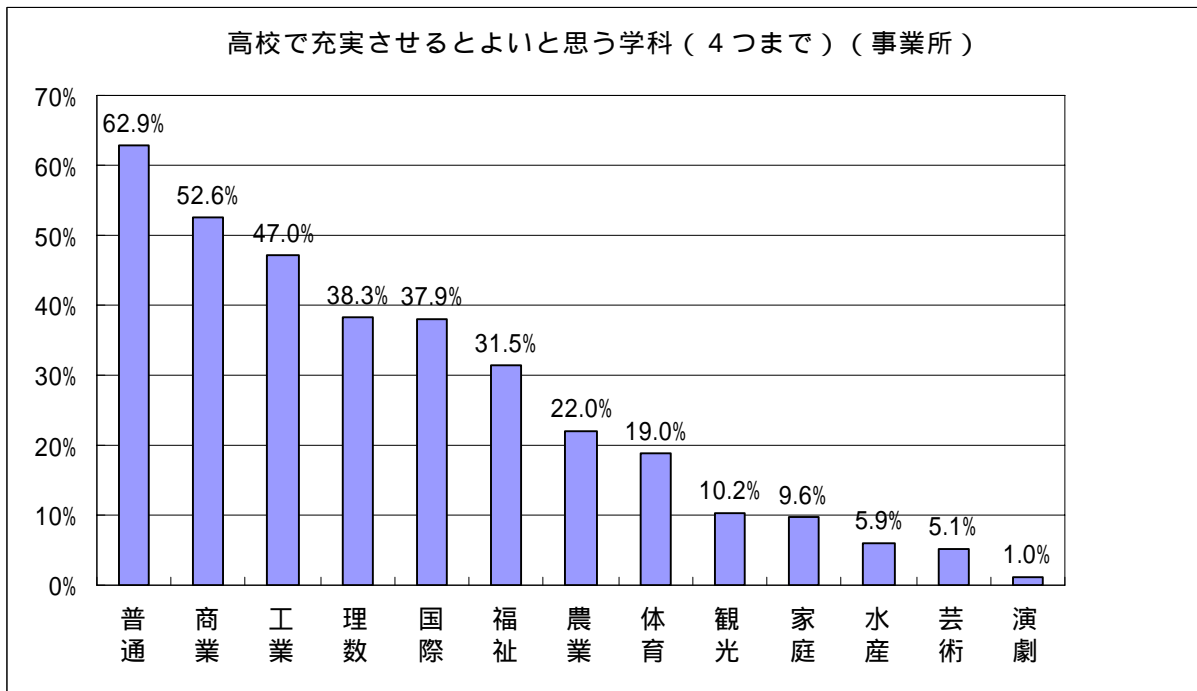
10 新たな学科の必要性

- ・高校生は、高校における教育に関し「理数系を専門に学ぶ教育」、「医学部医学科進学を目指した教育」、「福祉を専門に学ぶ教育」、「英語の授業に重点を置いた教育」、「海外留学を目指して外国語で授業を行う教育」、「国際協力を行う教育」、「スポーツを専門に学ぶ教育」について、いずれも全体の8割以上の高校生が必要だと回答している。
- ・事業所においても、「理数系を専門に学ぶ教育」、「スポーツを専門に学ぶ教育」、「福祉を専門に学ぶ教育」、「英語の授業に重点を置いた教育」、「海外留学を目指して外国語で授業を行う教育」について、いずれも5割以上が採用したいと回答している。



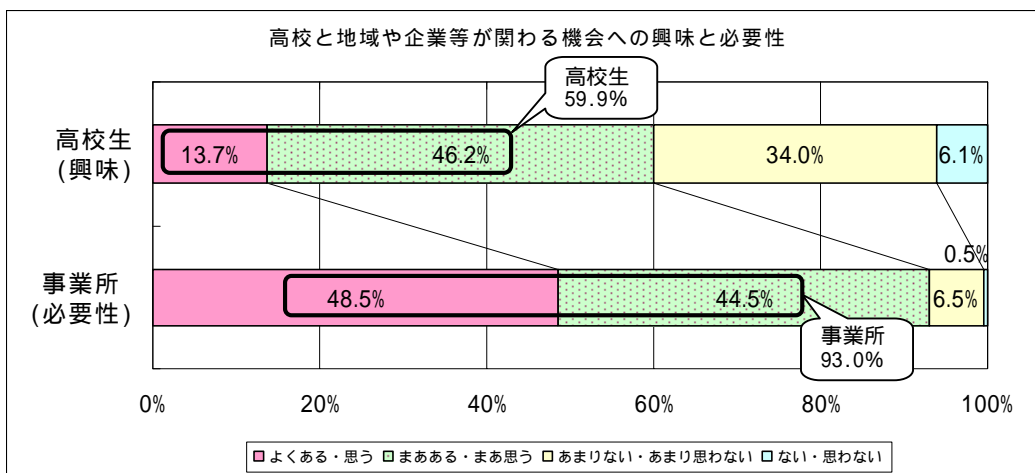
11 高校で充実させるとよいと思う学科

- ・事業所が高校で充実させるとよいと思う学科については、「普通科」が62.9%で最も多く、次いで「商業科」の52.6%、「工業科」の47.0%、「理数科」の38.3%、「国際科」の37.9%、「福祉科」の31.5%、「農業科」の22.0%、「体育科」の19.0%、「観光科」の10.2%、「家庭科」の9.6%、「水産科」の5.9%、「芸術科」の5.1%、「演劇科」の1.0%となっている。



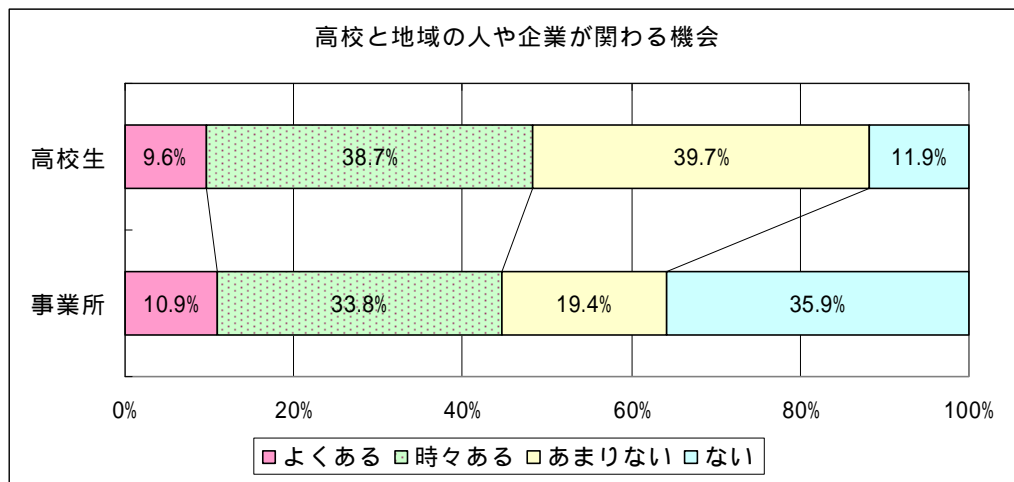
12 高校での地域連携への興味と必要性

- ・地域の人や企業に関わる教育に興味がある高校生は59.9%にとどまっているが、事業所においては、93.0%が高校と地域や企業等に関わる機会が必要だと回答しており、ギャップが見られる。



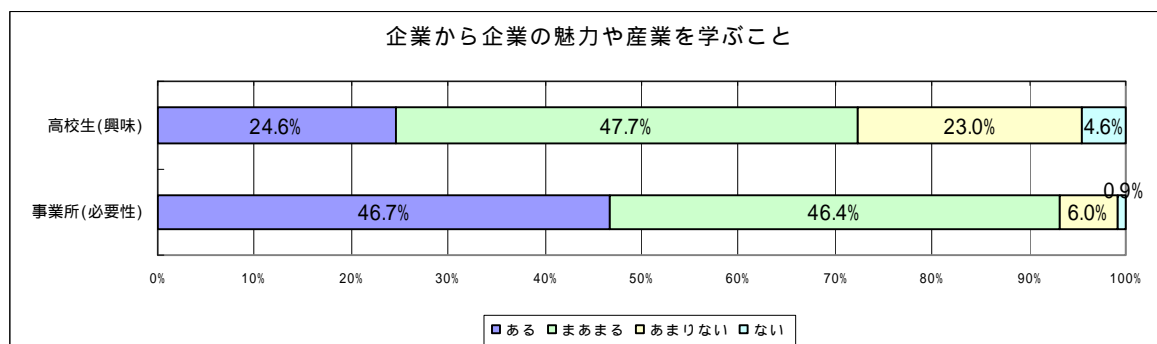
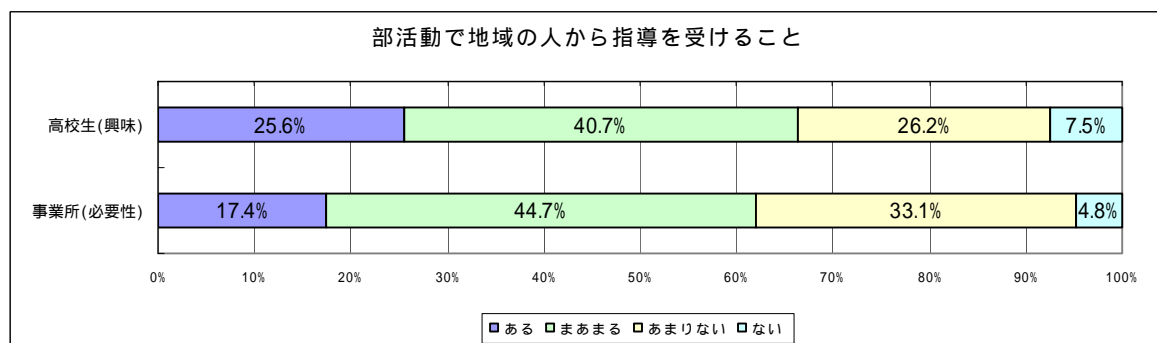
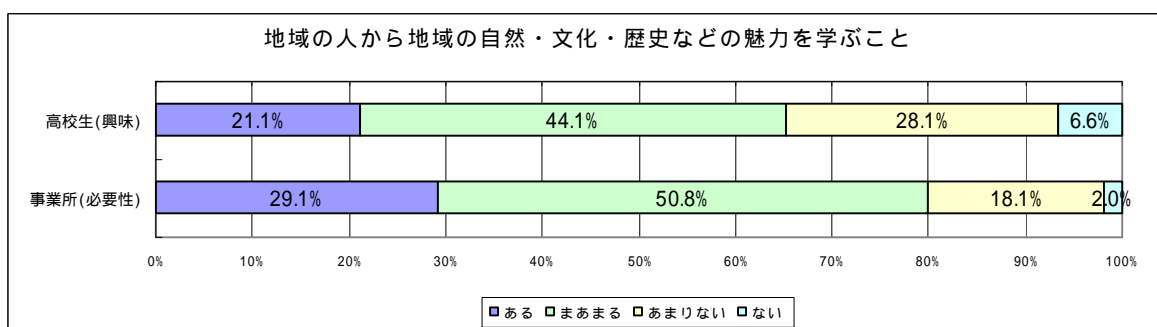
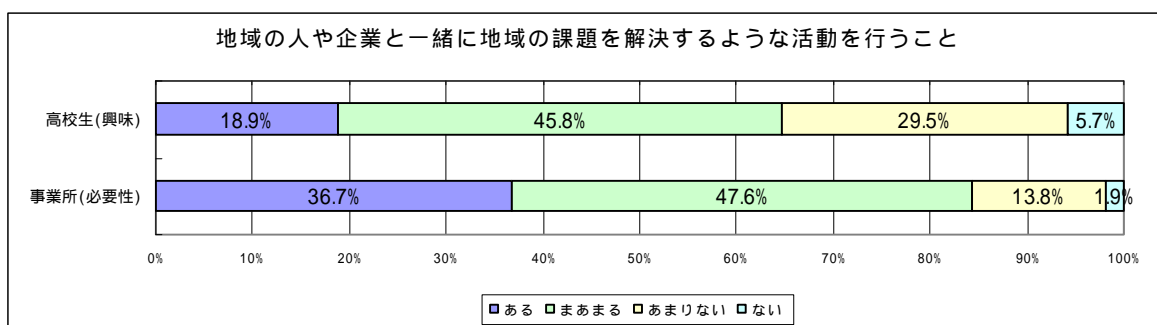
13 高校と地域の人や企業が関わる機会

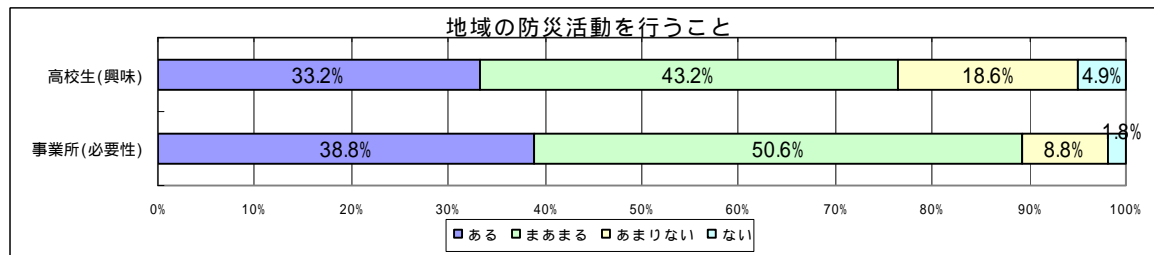
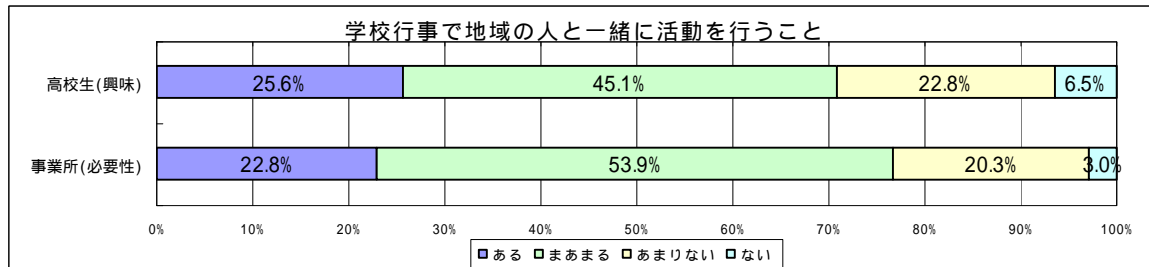
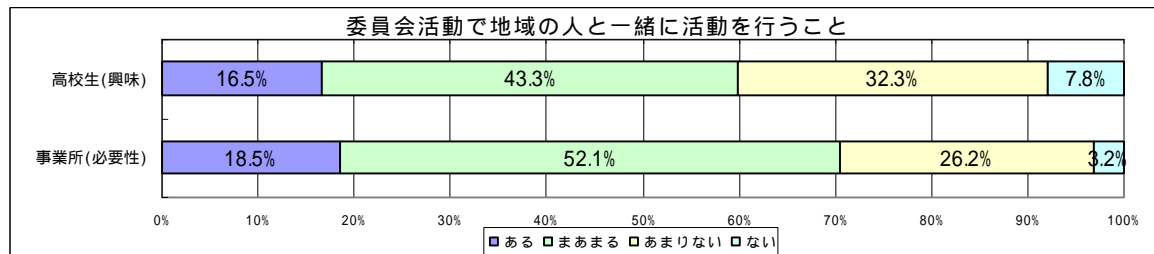
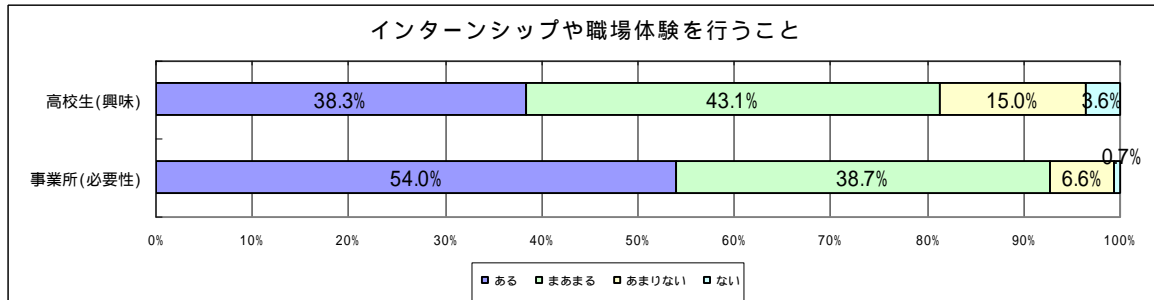
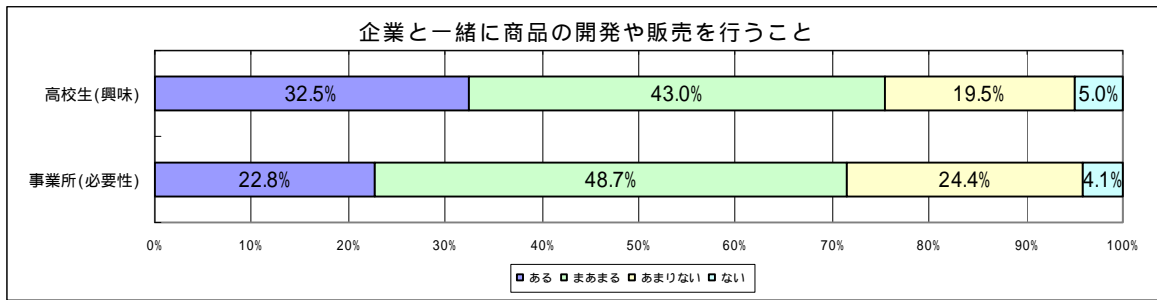
- ・地域や企業と関わる機会がある高校生は 48.3%、授業への参画やインターンシップなど高校と関わる機会がある事業所も 44.7%にとどまっており、必要だと考えている事業所が多い一方で取組が広がっていない。



14 高校での地域連携の具体的内容への興味と必要性

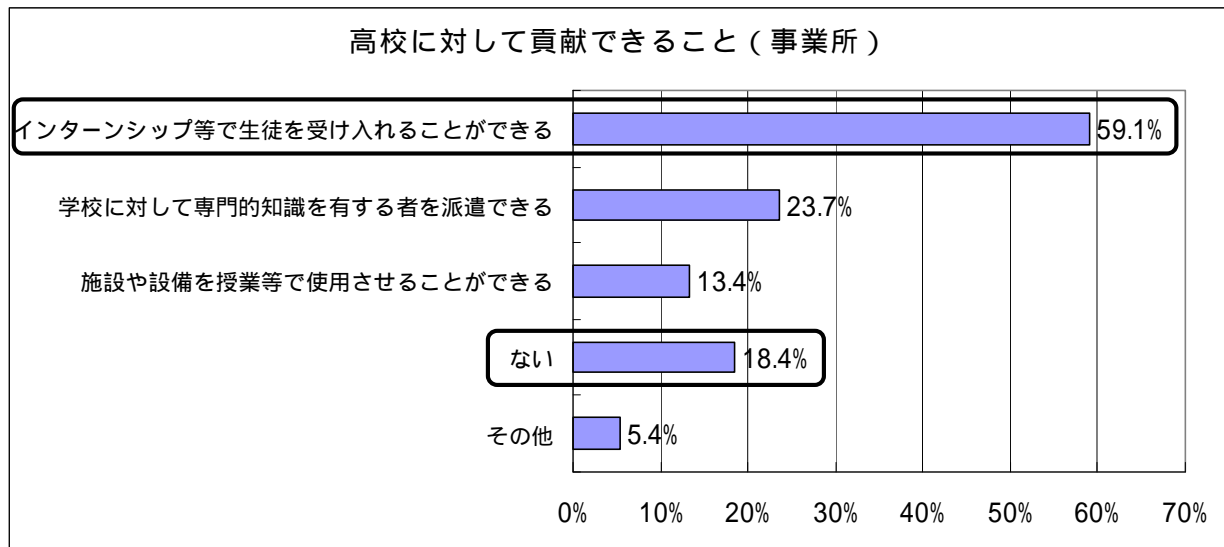
- ・地域の人や企業が関わる教育に興味がある高校生が 59.9%にとどまっている一方で、「インターンシップや職場体験を行うこと」、「地域の防災活動を行うこと」、「企業と一緒に商品の開発や販売を行うこと」、「企業から企業の魅力や産業を学ぶこと」、「学校行事で地域の人と一緒に活動を行うこと」については、いずれも全体の7割以上の高校生が興味を持っている。
- ・事業所においても、「企業から企業の魅力や産業を学ぶこと」、「インターンシップや職場体験を行うこと」、「地域の防災活動を行うこと」、「地域の人や企業と一緒に地域の課題を解決するような活動を行うこと」について、いずれも8割以上が必要だと回答している。





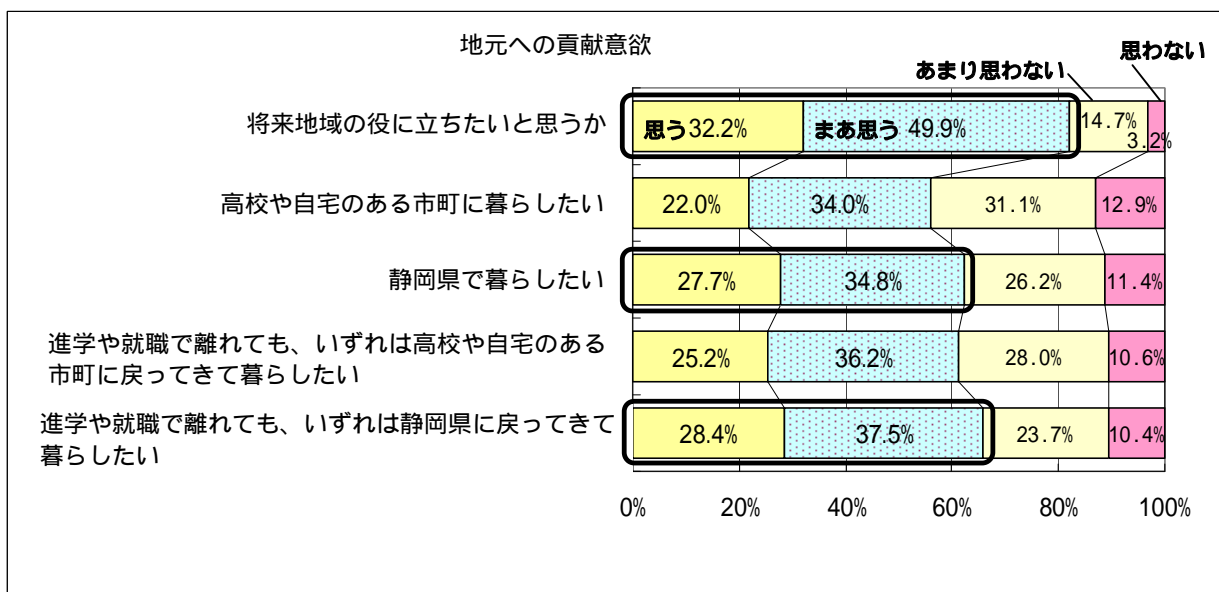
15 高校に対して貢献できること

- ・事業所が地域に対して貢献できることは、「インターンシップ等で生徒を受入れることができる」が 59.1%で圧倒的に多く、次いで「学校に対して専門的知識を有する者を派遣できる」となっているが、一方で「ない」との回答も 18.4%となっている。



16 地元への貢献意欲

- ・将来地域の役に立ちたいと思っている高校生は、全体の 82.1%となっており、地元への貢献意欲は見られるものの、進学や就職で離れても、いずれは高校や自宅のある市町に戻ってきて暮らしたいと思っている高校生が全体で 61.4%、いずれは静岡県で暮らしたいと思っている高校生は全体で 65.9%にとどまっており、3割以上の生徒が県外での生活をイメージしている。



「才徳兼備の人づくり小委員会中間報告」に関する実践委員会の意見

ICTに関しては、生徒の知識やスキルが向上してきているので、自主性や主体性を育む「才徳兼備」の人材を輩出するという意味では、早くハード面を整備して走り始めていくことを強く望む。

日本は、創造力を学ぶ教育が遅れているが、生徒は主体的に行動するので、ICTをもっと使うことで、創造力を学ぶ機会を作してほしい。

今の高校生は、自ら地域と結び付き、地域と一緒にまちおこしなどを行うエネルギーや企画力が優れ、ICTを駆使して外へ発信する能力もあるが、意欲的な生徒とそうではない生徒との格差が問題であり、置き去りにされている子供たちをいかにやる気にさせるかが大事である。

国際化の面ではまだ格差があるので、英語をツールとして海外の生徒とディスカッションして、更に新しい取組を英語で発言して連携していけるレベルまで静岡県でも目指していくとよい。

高等学校に関するニーズ調査の結果では農業に関する数値が低いので、農業が盛んな本県において、農業と社会を結び付けて新しい取組ができるとよい。

自ら考えて行動する力を企業側は求めているので、自ら考えてどう組み立ていくのかという力を身に付けられるような教育が小学校から必要である。

高校を卒業して社会に出る子供も増えてくるので、いかに高校時代に社会活動を経験できるかが大事である。社会経験がなく教える立場に就く人もいるので、アルバイトだけではなく、単位化したりカリキュラムに入れたりして企業や社会で経験してもらえると見え方が変わってくるので、そこに重点を置く項目が入ってくるとよい。

最終的な人づくりの方向性としては、自ら考え行動できる人材の育成は正しい方向である。国が行おうとしている教育改革は正しい方向だが、授業や教員の教育の仕方が相当変わってくるので、県も国の流れに沿ってやるべきである。

企業側が即戦力を求めた結果、新人に高度なレベルを求めることになっているが、遠回りして教えるような無駄を排除した教育の中身が影響している。地域との関わりは、教員や学校にそのゆとりがないのが実情であるが、生徒に何かきっかけを与えるためのサード・プレイスを地域の中につくり、そこに企業も参画し融合すれば、積極的な生徒と気後れしている生徒にある想いの格差を解消できるのではないか。

高校生や大学生は、魅力あるまちにある学校に行こうとしているのが実情であり、まちづくりが非常に大事である。魅力あるまちづくりを行うと、そこにある学校や企業も光ってくるので、まちづくりと学校づくりが両輪で必要である。

キーワードは、「地域との関わり」と「学校の経営」をどのように変えていくかということだと感じた。生徒が地域の企業や社会と関わりながら様々なことを経験していくことは重要だが、校長も地域を理解するようになると他の教員にも影響を与え、教員も地域を理解すれば、生徒の活動しやすい環境が整う。

静岡県の高中生には失敗してはいけないという強い意識があり、それは高校生の周りに失敗した人がいないからである。高校生には周りの人々に多様性があるように見えないので、多様な大人や生き方を中高生のうちに様々な形で見てもらえればよい。

美術館の展示では、説明を読んでから物を見るのではなく、先に物を見るようになってきている。それは、物を見ることによって、自分の感性を働かせて自分の判断をしたいという意識が芽生えてきたということであり、説明を記憶するのではなく、自分で見て感じたことを言葉に出すようになってきた。有名な画家だけの展示では人は来なくなり、既成概念で物を見るという伝統が変わってきているので、どのように個々の感性を育成するか考えていく必要がある。

好きなことや得意なことに人生のチャンスがあり、部活動にはすごいチャンスがあるので、部活動の指導に情熱を捧げたい教員に対して、授業のコマ数を減らしてその分を部活動の時間に移動するなど、部活動も授業として捉えて指導できる仕組みを静岡モデルとして作ればよい。

リモートは効率がよく便利で非常に重要であるが、コミュニケーション能力をどう鍛えていくかも重要な方向性であり、意欲や情熱をどのように育て上げられるかがポイントになる。失敗の多い人が成功も多くなるので、子供たちにチャレンジさせる、挑戦させ続けることが大事であり、努力する習慣を身に付けさせることが学校のやるべき仕事である。

子供たちは、人間らしい大人と出会い、魅力ある大人との出会いによって変わっていく。学校の教育目標に合わせて、各学年で地域のいろいろな人の志を知り、自分の志を立て、その志を地域の人と実現させる取組を通じて、生徒たちが自分の志という芯をつくることができ、高校入学後に自分が活躍するというよりもマネジャーになる生徒が増えた事例があった。生徒自身が地域の方と関わって、何がどう変わるかが重要である。

実際のリアルな社会と学びがどうつながっているか興味を持たせ、生徒がいろいろなことを経験することで、こういうことを学びたい、学ばなければいけないと変わっていく。技術や資格に走りがちだが、どこに行っても通用する力という土台を身に付けることが大事である。

目に見えて成果が見える施策に目が奪われがちであるため、時間をかけて腰を据えて物事に取り組む研究に対しての理解を学生や社会人に対して伝えていかなければならない。人文科学の研究者には、すぐに結果は出ないが可能性を持った人がいる。そういうところにも人材が流れるように、IT やその活用に関する研究もよいが、古典や昔からある研究等に対しての重要性を再認識する授業を高校や中学でも取り組んだ方がよい。

今までの学校教育の中にも自ら考え行動できる子供は育つ環境はあるので、進学という一大イベントを自分の力で乗り越えるということまで導いて後押しすれば、受験を通して自ら考える力は十分付くはずである。

学校行事が縮小され、学校が進学学力にあまりにも傾倒しているなので、昔からやってきたことをしっかりやっていけば、自ら考え行動することは十分できる。加えて、総合学習が充実してくれば、静岡県の教育になっていく。

小委員会での議論を来年度も進めていただき、熱心な方々のすばらしい御意見を伺い、実践委員会の意見として総合教育会議に反映していく形をつくりたい。

未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進に関する論点

科学技術の発展やグローバル化の進展は、社会の在り方にも変化をもたらしており、IoTやAIをはじめとする技術革新の進展により、その変化はますます加速していくことが予想される。

このような社会においては、様々な変化や課題が生じると見込まれ、変化に適応するだけでなく、変化を受け止めて新たな価値を創造していくことが求められ、一人一人の状況に応じて、その力を最大限伸ばすとともに、才能や個性を發揮できるようにしていくことが重要である。

また、日本社会が抱える課題や地球規模の課題を自ら発見し解決できる能力や、地域が直接世界とつながる時代の中で、各地域においても国際的な感覚や視点を持って地域社会の創造・発展に積極的に貢献する人材の育成が必要である。

これらの課題に対応するためには、子供たちの個々の能力を伸ばし、未来を切り拓く多様な人材を育てていく必要がある。

論点1：才能を發揮する人材の育成

一人一人の能力、適性、成長に応じた多様な学習機会を提供し、個々の能力を更に伸ばしていくために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・秀でた才能を更に伸ばすための教育の在り方
- ・一人一人の能力を伸ばすための学校教育や家庭教育の在り方
- ・個人に応じた多様な学習機会を提供するために必要な取組

論点2：グローバル人材の育成

グローバル化が進展する社会において、世界に貢献できる人材を育成するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・世界に貢献するために必要な、豊かな国際感覚、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等の育成
- ・グローバル化に対応した教員の資質・能力の向上

未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進の主な取組と今後の方向性

主な取組

1 才能を発揮する人材の育成

魅力ある学校づくり推進事業（参考資料P2）

- ・ 技芸を磨く実学の奨励、知性を高める学習の充実、グローバル教育の推進により、魅力ある学校づくりを推進している。
- ・ 「生きる道」を意識した実学の奨励による専門的職業人の育成や高大接続改革等への対応、豊かな国際感覚を身に付けた人材の育成を図っている。

コアスクール（参考資料P4）

- ・ 新学習指導要領や高大接続改革で求められる「主体的・対話的で深い学び」を実現し、生徒が「生きる道」を身に付けられるよう、各学校で特色に応じた取組を進めている。

高校生アカデミックチャレンジ（高大連携推進）事業（参考資料P5）

- ・ 理数科や職業系専門学科等を設置する高校と大学との連携を一層強化し、高校生に高度な学問の一端に触れたり、研究体験や活動を行ったたりする機会を提供することにより、高校在学時から専門性を有し国際科学オリンピックや学会発表等で活躍する人材育成を推進している。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業／ワールド・ワイド・ラーニング（WWL）コンソーシアム推進事業（参考資料P6）

- ・ 新学習指導要領を踏まえ、地域を分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するため、高校が自治体、産業界等と協働して、地域課題の解決等の探求的な学びを進めている。
- ・ イノベーティブなグローバル人材を育成するため、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、高校生へより高度な学びを提供する仕組みを構築している。

科学の甲子園（参考資料P15）

- ・ 科学好きの生徒の裾野を広げ、才能を十分に発揮し、切磋琢磨する機会を提供するため、科学技術、理科、数学等の複数分野にわたる筆記・実技競技を競う大会。毎年、高校生、中学生それぞれを対象に、県大会及び全国大会が行われている。

トップガン教育システム協議会（参考資料 P 17）

- ・一人一人の得意を伸ばす教育システムを確立し、夢と志をもって世界的に活躍する人材の輩出を目的に様々な取組を行っている。

未来を切り拓く Dream 授業（参考資料 P 20）

- ・将来、日本や世界で活躍したいと考えている子供たちに、日常生活で触れる機会の少ない一流の講師陣の講義を提供し、学校では学ぶことのできない教養を身に付け、世界トップクラスの講師の人間性に触れるとともに、お互いに刺激し合える仲間を県内各地につくることで、子供たちが自らの価値を認識し、自らの能力を更に伸ばすきっかけを与えている。

未来を切り拓く Dream 授業・賀茂版（参考資料 P 22）

- ・ふるさとに誇りと愛着を持ち、地域の発展に貢献できる「賀茂の子」を育むために、賀茂地域に想いを寄せ力を尽くしている講師陣の講義を通じて、日常生活では目に触れることがない地域の実情や、講師の人間性に触れるとともに、お互いに刺激し合える仲間を地域内につくることで、自分の生まれ育った地域が大好きな子供たち、「地域のためになりたい」という思いを持つ子供たちを育成することを目的に、今年度から実施している。

日本の次世代リーダー養成塾への参画（参考資料 P 23）

- ・各界を代表する講師陣による講義、プロジェクト型企画「アジア・ハイスクール・サミット」、ディスカッション等を積み重ねて、リーダーとして必要な多面的な思考力や分析力を養う「日本の次世代リーダー養成塾」に参画し、本県の高校生を派遣することで、本県発展の中核的存在となる人材の育成を促進している。

静岡県文化プログラムにおける「地域部活」の取組（参考資料 P 25）

- ・平成 30 年度に文科部活動を一般社団法人が主催し、学校の管理外（地域）で行う新しい部活動「地域部活」を発足した。掛川市内の公立中学校の生徒を対象とし、音楽等の各ジャンルの専門家のアドバイスを受けながら、部員自ら企画・制作・運営を行っている。

活躍の例（掛川西高校・浜松工業高校）全国で輝いた技・芸の星＜産業・芸術編＞（参考資料 P 26）

- ・実学系高等学校等では様々な分野において全国レベルで活躍している。

2 グローバル人材の育成

グローバル人材関連事業（参考資料 P 34）

- ・国内外で活躍できるグローバル人材の育成を社会総がかりで支援するため、県拠出金及び寄附金により「ふじのくにグローバル人材育成基金」を創設し、県内の高校生及び教職員の海外留学・海外研修等を促進している。

グローバル人材育成の基盤形成事業（海外留学応援フェア）（参考資料 P 36）

- ・県内の学生及び高校生に対し、海外への留学を促進するため、海外留学応援フェアを年 2 回開催している。

静岡県教職員海外研修（参考資料 P 37）

- ・教員の指導力・専門性の向上やグローバル人材育成のため、教員を海外に派遣し、教科等の指導方法及び学校運営等に関する事項について研究を行っている。
- ・小学校英語の教科化への対応として、海外でのマンツーマン語学研修に参加することにより、教員の「会話力」を短時間で飛躍的に向上させるとともに、現地小学校等の視察を行い、渡航先の現状を肌で感じ異文化や共生教育への理解を深めている。

青少年の国際交流推進事業（参考資料 P 40）

- ・日中青年代表交流発展事業による相互交流や、モンゴル国ドルノゴビ県との高校生相互交流事業等により、地域外交を展開していく中でグローバル人材の育成を行っている。

県内大学等でのグローバル人材育成への支援（参考資料 P 42）

- ・県内高等教育機関のグローバル化支援や、外国人留学生の受入、日本人学生の海外留学を促進することにより、地域や世界に貢献できるグローバル人材の育成を図っている。

ふじのくにグローバル人材育成事業成果報告書（2019 年度）（別冊）

- ・ふじのくにグローバル人材育成事業では、高校生及び教職員の海外留学等を支援しており、2019 年度も高校生及び教職員が海外で様々な経験を積んでいる。

今後の方向性

1 才能を発揮する人材の育成

多様なニーズに対応した魅力ある学校づくりや学習のモチベーションを高める学校を創出することにより、一人一人の能力等に応じた学習を推進する。

産業界や高等教育機関等と連携・協働し、高度な技術や学問の一端に触れたり、研究活動等を行ったりする機会の充実を図っていく。

一人一人が挑戦を続け、秀でた才能を更に伸ばすことができるような教育を推進するため、才徳兼備のリーダーとなる人材を育てる取組を推進していく。

ICTの活用等により個別最適化された学びを実現し、一人一人の能力や才能などを更に伸ばす教育を進めていく。

2 グローバル人材の育成

国内外で活躍できるグローバル人材を育成するため、引き続き、高校生及び教職員の海外留学や海外研修等を推進する。

小学校での英語教科化に対応するため、研修等の実施により校内の英語教育推進体制の充実を図っていく。

県内高等教育機関のグローバル化支援や、外国人留学生の受入、日本人学生の海外留学を促進することにより、地域や世界に貢献できるグローバル人材の育成を進めていく。

ICTを活用した教育の推進を図る中で、いつでもどこでも世界と繋がることができるICTのメリットを生かした国際交流等の取組を進めていく。

「未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進」に関する実践委員会の意見

持続不可能になりつつある状況に危機感を持って変革できる子供が最も必要なグローバル的に活躍できる子供である。地域の困りごとについて、結果は出なくても取り組むところまでは総合学習でやってほしい。自分の進路や受験に関わらなくとも、変革と利他をポイントにSDGsを総合学習で進めていくとよい。

才能を発揮する人材とグローバル人材の育成については、静岡県内の人たちだけで考えていても難しい。国内の好事例を静岡県に当てはめるといふ発想では駄目である。例えば、ミネルヴァ大学の寮やイギリスのパブリックスクールを誘致するなど、失敗してもよいので教育行政に関わる人のマインドセットを変えなければ、幾ら静岡に関わる人たちが話し合いをしても縮小していくような政策しか出てこない。

全県下平等に実施すると大変なお金と時間がかかるので、例えばトヨタによる裾野の未来都市の建設などに乗るのも一つのアイデアである。

グローバル人材の育成において、オンラインではできない生身の付き合いは大事だが、新型コロナウイルス感染症の影響により、海外に生徒を送ることができないので、海外から優秀な高校生を農業高校などで受入れてほしい。

アジアの中ではイスラム教徒が多く、本県のようなクオリティ・オブ・ライフが高い地域で子育てし大学に行かせたいと考えているので、海外から勉強するために来てもらうためには、欧米ばかりに目を向けずに、身近なアジアからすばらしい先生をたくさん呼べるよう環境整備をすると、本当の意味でのグローバル人材が育つ。グローバル人材の育成について、海外から来てもらうものなのか、県民が頑張るものなのか明確にすべきである。

限られた人数が限られた日数だけ海外に行き、リアルな体験を積むことはとても大事だが、高校生の頃から自分の言いたいことが言える、読みたいものが読めるぐらいの英語力を身に付けるためには、安いオンラインの英会話教室もある。できれば小学校から、流暢な英語でなくても互いに通じ合えるような英語を毎週使うことが大事である。英語に触れていくことが優秀な才能を伸ばすことにつながるため、予算や仕組みの面で具体化をお願いしたい。

静岡にいても世界に貢献できるということを考えると、世界で活躍するために子供たちを育てるのではなく、世界に貢献できる人材を育てていくという考え方にしなければ、優秀な人材はとにかく外に行きなさいということになり、遠くに行くことが目的で何が最終的な人生のゴールなのか見失ってしまう。

一人一人の才能は違っており、その才能を伸ばす時にどれだけの教員がその生徒に対して目を向けているかということが、その生徒の才能をうまく汲み上げるための大事な仕組みだが、教員の多忙化により手が回っていない現状では、一人でも多くの生徒に目を向けられるような状況をどう作るかが非常に大事である。

週1・2回の語学では英語を話せるようにならない。最低でも毎日1・2時間は学ばなければ身に付かないので、本当の意味でのグローバル人材を育てていくのならば、授業を完全に英語で行うことが重要である。